

連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ 15

こころの未来—私たちのこころは何を求めているのか— 第1回

日本文化における主体性とは何か

— 日本人の意識、感情、関係性からの考察

京都大学が東京・品川の「京都大学東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ 15「こころの未来—私たちのこころは何を求めているのか—」。5月28日の第1回講演では、こころの未来研究センターの内田由紀子 特定准教授が「日本文化における主体性とは何か—日本人の意識、感情、関係性からの考察」と題して、文化心理学の立場から、日本における主体性について論じた。今シリーズは、講演後にディスカッションが登場。第1回は吉川左紀子 こころの未来研究センター長が務め、講師とは異なる視点を投げかけることでテーマを深めた。

●日本における主体性とは



「文化心理学で重要なのは実証研究」と内田特定准教授。「こころという捉えどころのないものをデータによって形が見えるようにし、そこに意味を与える作業が必要です」

こころの未来研究センターの内田由紀子 特定准教授が専門とする文化心理学とは、こころの働きが、我々の社会生活や文化とどのように関連しているか、実証的に研究する学問分野だ。比較文化研究を中心に、「こころの普遍性を問い直す」「文化や社会の中でこころが育まれるプロセスの理解」という2つのミッションを立てている。

比較文化のデータを見る上で注意すべきなのは、あくまである文化の平均的なありかたを抽出しているものであり、当然同じ文化内にも個人差があることと、日米を比較する二分法ではなく、当然いろいろな国や文化があることの2点。「これを前提に、1つの事例として日米比較のデータを取り上げます。まず初めに、日本における主体性とは何か、回答しておきます」

「日本における主体性は、人の内に存在する絶対的なものではない」というのが、内田

特定准教授の答えだ。むしろ日本における主体性は「その場で立ち上がってくるもの」「やってくるもの」「受け入れるもの」である。時には主体性そのものがない場合すらある。

「このような日本における主体性について、さまざまなテストに基づくデータを示しながらご説明します」

●相互協調的である自己

「さっそく、実際に研究で用いられたテストを試してみましょう」

提示された問題は、「“私”を表現する文章を5つ書く」というもので、書いた文章を「性格や能力」「所属やプロフィール」「趣味や行動」「一般的に良いこと、悪いこと」に分類する。

内田特定准教授が示した例には、最初のほうに「関西出身」「19歳だ」「自制心にとらわれすぎる」「嫌われたくなく、寂しやがり屋だけれど、一人を好む」、次のほうに「外交的だ」「友好的でとても良い人間だ」「ずば抜けて頭が良い」といった文章が並んでいる。

実は、前者は京大生、後者はアメリカのミシガン大学生の回答。アメリカには性格や能力が多く、ポジティブなのに対し、日本は所属やプロフィールが多く、ニュートラルあるいはネガティブという特徴が見られる。

「主体そのものを尋ねた場合、日本は非常にあいまいなのに対し、アメリカ人のほうははっきりと立ち上がることが分かります」

ところが、興味深い結果がある。アメリカの研究者(Cousins, 1994)が、「家にいる時の私は」「会社にいる時の私は」など状況を特定して調査を行ったところ、日本では一気に主体性が立ち上がり、性格や能力などの自分の内的な特徴を書く割合が日米で逆転した。

以上の傾向について、文化心理学の第一人者による論文(Markus & Kitayama, 1991)では次のように述べられている。「アメリカの主体は相互独立的であり、自分と周囲の境界が明確で、主体性の源は私の中にある。一方、日本の主体は相互協調的であり、境界が不明確で、主体性は他者との関係の中で初めて立ち上がってくる」

●対人関係に見る主体性

「次に対人関係から見てみましょう」

テストの問題は次のようなものだ。「あなたとつきあいがある人たちの図を描いてください。一人一人を円で囲んで、人間関係のつながりがあるところを線で結んでください」

ここでも日米に差が表れる。アメリカは中心にいる自分からネットワークが広がるハブ型なのに対し、日本では自分はネットワークの中にいる。アメリカは自分のサイズが大きいが、日本では自分は他の人と同じサイズで描かれる。

対人関係の捉え方の違いは、友達との関係性にも関わる。内田特定准教授が以前行った調査で、「良い友達」について答えてもらったところ、日本人は「共有」を重視し、アメリカ人は「相手の属性」を重視することが分かった。当然、この傾向は人間関係の深め方にも関わり、積極的行動はアメリカ人に多く、受け身の行動は日本人に多い。

「日本における対人関係を考える上で、興味深いデータがあります」

それは内閣府による「子どもに希望する生き方」に関する調査。40%近い人が答えたのは「人に迷惑をかけない」という回答で、アメリカ人は「そんなことが1位なのか」と驚くという。

「人に迷惑をかけないというのは、他者の様子を見て初めて成立すること。つまり、日本における関係性は場の中で構築されるものであり、主体的に評価や選択することは少なく、他者に合わせる傾向が見えてきます」



子どもに希望する生き方について、他の国での回答には、「責任を持てる人になる」「人や社会に尽くせる」という、“責任”と“貢献”の2点が挙がるという

●対人志向的な日本における幸福感

最後のテストは、絵を見せて「中央の男の子がどれくらい Happy か、10点満点で考える」というもの (Masuda et al., 2008)。何枚か呈示された絵の中央の男の子はすべて同じ笑顔だが、周りにいる人たちは皆怒っている表情であったり、中心人物と周辺人物で表情が違うものがある。

中心人物も周囲も笑顔の場合と、中心人物は笑顔だけれども周囲が笑顔ではない場合の、「中心人物の感情」についての日米比較の結果を見ると、アメリカでは周囲の表情に影響されていない、つまり前者の場合も後者の場合も Happy と判断される程度は同程度であるのに対し、日本では前者ではアメリカと同じぐらいでも、後者になると、評定値が下がる。

つまり、日本人は、周囲の状況など多くの情報を含めて、相手の感情や幸福感を判断しているのである。アイカメラを使って、被験者の視線も調査されているが、日本では、周囲の人の表情を見ている時間がアメリカ人に比べて長いことが分かっている。

以上から見えてくる日本における幸福感の特徴について、内田特定准教授は「人並み感」「協調志向性」「穏やかさ・平穏さ」を挙げる。日本人は、人と比べて幸福かどうかを判断する人が多く、自分一人だけでなく家族も周囲も幸せであること、また、日常が幸せであることを重視する。「日本における幸福感は対人志向的なのです」

●なぜ文化差が生じたのか

「主体性の文化差は、いつ、なぜ生じたのか」。いくつかの仮説がある。

1点目の「生業説」は、農耕と牧畜など、生業の違いが要因であるとする説。特に、米作は労力が大きく集団行動が必要であり、*Science* 誌の最新の論文では、中国の米作が多い地域は麦作が多い地域に比べて、主体性が弱く関係志向的な傾向が強いというデータが示されている (Talhelm et al., 2014)。

2点目は「人口移動説」。特に北米はヨーロッパからの移民が多く、言語や価値観が異なる中、明確に自分の意思を示さないとコミュニケーションが成立しなかった、とする説だ。

3点目は「風土・環境・気候要因説」。自然環境によって自分の身の守り方、助け合い方が違うのではないかというもの。

4点目は「病原体の流布説」。病原体が流行った歴史と、規範に沿った行動をする程度に関わりがある、と考えられている。

5点目は「遺伝子多型による説明」。遺伝子解析により、民族ごとにストレス耐性に関わる遺伝子多型が異なることが示されている。日本人の遺伝子型はストレスに弱く、脆弱性を守るために互いに迷惑をかけない、助け合うといった傾向が出てきたとする仮説だ。

「どれが最も有力な説か検証している段階ですが、生業説と人口移動説に関しては、いろいろな証拠が呈示されてきています」

●「日本のこころの未来」のカギは？

近年、日本社会はグローバル化の流れの中で、主体をはじめ競争や評価を求められ、価値観の変化を強いられている。とはいえ、そう簡単に主体性を持つことはできず、孤独感や孤立、ひきこもりの増加も指摘される。

また、個人と集団は衝突を起こしやすく、衝突への反応として、集団や組織への拒絶や、揺り戻しとしての絆回帰などが起こってくる。

「日本は個として主体的行動を取ることが難しい社会。それならいっそ対人関係を切り捨てようとする人も増えてきます。その結果、幸福感が減少しているのではないかと、私たちの研究チームは考えています (Ogihara & Uchida, 2014)」

さらに、「対人関係は、日本では主体性の源であり、主体を立てるために関係を切るとは本末転倒。日本において、他者との関係性や関係性の基盤となる場を抜きにして主体を育み、行動することは難しい。まずは場を醸成することに立ち返るべきだ」と、内田特定准教授は指摘する。“場”のカギは、「主体が浮き立ち、持続可能な幸福感を持てること」。

「そのためにも、主体性と、主体性とは切り離せない他者との関係性に今一度立ち返り、身体とところと社会をつなぎ直さなければなりません。日本の主体性が成り立つ社会システムづくりに、こころの科学が貢献できる道を模索していきたい」

内田特定准教授の講演は、こころの研究が目指す方向を示すものであった。

※ () 内は研究者名・発表年を記しています。



ディスカッサントとして吉川左紀子 こころの未来研究センター長（左）が参加

【吉川】文化比較は空間軸による比較だが、時間軸、例えば世代間のこころのあり方、主体性のずれなどを比較することも重要ではないか。

【内田】時間軸による比較は可能になりつつある。1950～60年代頃から各国で調査が行われ、データの蓄積が進んでいる。これにより、いつの時代も10歳代と60歳代には違いがあるのか、あるいは1960年代と2000年代による違いがあるのか、と

いったことが明らかになるだろう。

【吉川】大きな価値変化の中で生きる日本人のこころのあり方を考える時に、文化心理学はどんな役割を果たすべきだと考えているか。

【内田】日本における対人関係の重要性などについて、実証的な証拠を示すことで、未来の日本のこころのあり方に貢献したいと考えている。